令和五年一月

大学院文学研究科

櫻井　弘人　提出　学位申請論文

『遠山霜月祭の研究』審査報告書

國學院大學

櫻井　弘人　提出　学位申請論文（論文博士）

『遠山霜月祭の研究』審査要旨

論文の内容の要旨

本論文は、「遠山谷」とか「遠山郷」と通称される長野県飯田市の旧上村と旧南信濃村の各集落に伝承、継承され、それぞれの鎮守社で斎行される霜月祭についての研究である。この祭りは、その伝承地と斎行時期から西角井正慶が昭和六年の『民俗藝術』四巻五号に「信州遠山の霜月祭り」と題して祭りの次第と内容をまとめて著し、昭和九年にはこれを著書『神楽研究』に収めている。その後、この祭りは「遠山祭」とも総称されるが、昭和五十四年二月には「遠山の霜月祭」の名称で国の重要無形民俗文化財に指定され、以後、これが総称として使われ、本論文名もこれによっている。

遠山霜月祭（以後「霜月祭」という。）は、昭和二十年前後には遠山郷の十六ヶ所、十七神社で斎行されていたが、その後、平成九年までは上村地区四

ヶ所、南信濃地区八ヶ所の計十二ヶ所・十三社での斎行となり、令和元年には上村地区四ヶ所と南信濃地区四ヶ所の計八ヶ所での斎行となっている。いわゆる戦後の高度経済成長や二〇〇〇年代以降の社会状況の変化に伴う過疎化、人口減少などによって霜月祭継承が困難になり、斎行集落が減じたのであり、その継承、持続の困難さは現在も続いている。

こうした現状をもつ霜月祭について、論文は、序章では研究の対象地の概要、目的、研究法、先行研究を論じている。これに続く第一章から第九章が本論であり、終章では本論文のまとめと今後の課題をあげる。さらに巻末には資料として霜月祭の式次第、霜月祭の面一覧、霜月祭を開催する主な神社の平面図、霜月祭とその関連事項に関する年表を付す。以下では第一章から論文内容の要旨を記す。

第一章「遠山と霜月祭」では、まず遠山谷の自然・歴史・民俗の環境を概観する。それは民俗芸能を含む祭りは、これを育んできた自然環境とこのなかでの生業、その地の歴史と密接に関係することによるとする。具体的には、遠山

谷は赤石山脈と伊那山脈に挟まれた日本屈指の活断層「中央構造線」沿いの深い谷間に位置し、こうした立地によってこの地域は周辺との隔絶性を有しながらも、この谷筋は南北を結ぶ縦貫道ともなって文化交流を生み、その山間立地から住民は林業と焼畑などを生業としながら、これに基づく多彩な生活文化を育んできたと概観する。

次には、こうした環境のもとで継承されてきた霜月祭について、この祭りの呼称、起源伝承、実施箇所をあげて、これには四タイプ（系統）があることを提示し、神社と祭りの担い手を叙述する。起源伝承については、京都から習ってきたとか熊野や伊勢の神人が伝えたという伝承や百姓一揆によって領主を殺害した祟りの沈静のためとする伝承などがあり、また、この祭りの起源は約八〇〇年前とする言説があることをあげ、それぞれを吟味、検討しながら、これらの伝承の扱いには慎重を要すると指摘する。

霜月祭の内容については、従来の研究を踏まえ、遠山谷の地区区分に依拠した上町、下栗、木沢、和田という四タイプがあることを、神面舞の構成と目的、

囃子の楽構成などの特徴をあげながら示す。その上で、歴史的には木沢タイプと下栗タイプの二つは元来同一のタイプであったが、斎行日の新暦への移行時期に差異が生じたことで、現在では別のタイプとなったとする。ただし、祭りの内容としては木沢、下栗タイプと上町タイプの三つには共通性が高く、和田タイプは独自色が強いとする。

また、祭礼を行う神社の歴史や社殿などで祀られる神々を検討すると、元の領主であった遠山氏八柱の御霊も祀る遠山氏御霊（八社神）系八幡神社、遠山氏二代の御霊を祀る遠山氏御霊（両大神）系八幡神社と、遠山氏御霊を祀っていない非遠山氏御霊系神社に分類できるとする。こうした各神社の祭祀状況が霜月祭の開始年代や目的と密接に結びつくとし、霜月祭は《遠山氏御霊（両大神）系八幡神社》から《遠山氏御霊（八社神）系八幡神社》へ広がり、その後に八幡神社以外の神社《非遠山氏御霊系神社》へも拡大したとする。また、上町タイプにおける宮天伯社は鶴岡八幡宮などの武内社に倣ったもので、中郷正八幡宮において、本殿の四方に外宮を配する形は、武内社と外宮とで社殿を護

衛するという宗教的な意図があるとする。さらにこの章では、祭りを担う人々について、禰宜、宮世話人、神名帳奉読役、精舎つとめ、賄い役、面役など霜月祭の諸役について具体的に示す。また、祭儀を司る宗教者である禰宜については、これによる諸祭祀、日常生活の様相などを明らかにする。

第二章「遠山霜月祭の実際」では、祭日と日程、本祭りの次第構成と儀礼内容、共食儀礼と特殊な神饌などを論述する。祭日と日程については、「霜月祭」の名のように旧暦霜月であったのが、後にはその季節感を重視して新暦の十二月に変更されているが、遠山谷のなかで各地区の祭りの日取りは重ならず、祭日がずれていることを取り上げている。こうした霜月祭日程は、地域内での協力関係を背景とし、この祭りが上町、木沢、和田の拠点神社から周辺の神社へと広がるなかで順次一日おきになるように日取りが決められたことによるとする。

祭りの次第構成については、上町タイプと木沢タイプでは祭り構成が前半と後半の二部構成であること、この構成を基に祭りの終盤に神面を着けた面形舞が新たに加わったこと、祭りの内容には湯立や舞を例年の形式で行う「式礼」

と、祈願・願成就報謝のための湯立と舞である「願」とがあることを明らかにする。また、座揃え・直会などの共食儀礼、神饌調製やその献供法などを詳細に記し、その手順、内容から霜月祭には細部にわたる作法、規範があることも明らかにする。

第三章「遠山霜月祭の湯立」は、霜月祭の中心をなすといえる「湯立」を取り上げる。たとえば上町では「先湯」「願の湯」「御一門の湯」「鎮めの湯」があるように、それぞれの祭りに数種の湯立がある。これら湯立に唱えられる呪文は神仏混淆の色彩が強く、両部神道の流れを汲むこと、その内容は、前述の霜月祭の各タイプ、神社によって差異があって一様ではなく複雑であることを具体的に示す。こうした実態を踏まえて、湯立は、式礼では三段階からなり、これに立願の湯立が附属する形式であることを明らかにする。

さらに霜月祭の湯立は、従来から指摘される探湯や清めというだけではなく、「聖なる水」〈陰〉と「聖なる火」〈陽〉があわさって生まれる「聖なる湯」〈陰陽合一〉という理解のもとに、その湯を神々に捧げて湯浴みさせ、自らも

浴びることで生命の復活、すなわち「生まれ清まり」の祭儀であると説く。そして、ここには湯の上飾りや神楽歌からうかがえるように、「湯の父」「湯の母」という夫婦二神の交合によって新たな生命が誕生するという考えが潜んでおり、湯は「産湯」でもあり、新たに誕生した命を清めるものであったとも説く。

第四章「遠山霜月祭の舞」では、ゆったりとした笛のメロディーで五方を拝んで舞う上町・下栗・木沢タイプに対して、笛のない和田タイプでは隅固めの足踏みを重視したテンポの早い激しい舞となっている。こうした違いを指摘した上で、霜月祭の神楽での舞には定められた舞順（舞式）と所作に意味があることから、和田の舞について分析し、「五方拝」や「四方拝」という方位、「晴明判」「北斗七星」という軌跡、「三三九」や「七五三」という数に基づく舞の構成原理があることを明らかにする。

第五章「遠山霜月祭の立願」では、この祭りを根底から支えてきた村人が寄せる祈願である「立願」の具体相について、聞き取り調査の成果をもとに明らかにする。立願は、規模によって三種に大別でき、最大の立願は「宮神楽」「一

幡」「釜換え」と呼ばれ、その特徴は起請文のような「立願帳（願帳）」を記すことにある。これには本人ないしは家族が掛ける大願と周囲の者が掛ける見舞いの立願がある。こうした大願と、「七石」「十二立」などと呼ぶ中願・小願、もう一つは「神子（カミコ）の願」で、それぞれ具体的な内容を明らかにする。立願は、今日ではほとんど忘れ去られた存在となっているが、なかでも「神子」は、天竜川流域の霜月祭を特徴づける習俗で、天龍村では「生まれ清まり」によって神の子として再誕生した者が一生涯神に奉仕を誓うものとなっているとする。さらに行道面の奉納も立願によっていて、奉納後は奉納者ないしはその子孫や一族が永代にわたって舞いつづけることを前提としたとする。

第六章「面からみた遠山霜月祭」では、各神社の祭りに登場する十五から四十一面、遠山の霜月祭全体では総数としては二八六の神面の悉皆調査を行い、その全容をまとめている。現在では使われていない面も含めた調査に基づき、紀年銘のある神面を基準にして面形、作風から編年分析を行う。分析結果から霜月祭の各タイプの面の基本構成（組成）を求め、その組成の変化を検討

する。

その結果は、シズメ面を除くと、神面は木沢の元和二年（一六一六）・八年（一六二二）、寛永十七年（一六四〇）の遠山氏御霊面が古く、これは面形舞の成立にとって重要な指標になることを指摘する。これ以後、御霊信仰と深く結びついた八幡神社においては遠山氏の御霊鎮め・慰撫・鎮送のために面が奉納され、ことに延宝四年（一六七六）には上町において遠山氏御霊面が八所御霊にちなむ八面に整理され、面全体を十五面とする基本構成が誕生した。これが上町タイプの〔御霊調伏型〕であり、こうした神面からの霜月祭分析の結果、和田タイプは〔シズメ原理型〕から後に〔シズメ原理・御霊鎮送型〕へ、木沢・下栗タイプは〔シズメ原理型〕から発展した〔御霊封鎖型〕へと推移したとする。さらにこうした神面からの分析をもとに、霜月祭には、この地が鎌倉時代には信濃国唯一の鶴岡八幡宮神領となったことに起因する八幡信仰を基盤にして、百姓一揆で滅び、後に祟りを起こしたとされる旧領主遠山氏への御霊信仰が内在すると指摘する。

遠山霜月祭は、その後、八幡神社以外の神社にも広がるなかで、それら神社の祭神面から村内にまつる神々の面の奉納へと拡大し、霜月祭は御霊鎮めから村内の神々の守護を求める祭りへと変化したと説く。

第七章「遠山霜月祭の変化と変容」では、前章の分析によって明らかとなった神面奉納の歴史と構成の変化をもとに、霜月祭の各タイプと《遠山氏御霊系八幡神社》と《非遠山氏御霊系神社》という神社区分を組み合わせて面形舞の変化を検討し、これを歴史的な事象と重ね合わせ、霜月祭の目的の変化とその理由を検証する。結果としては、シズメ面の変化も含めて、「水の王」と「火の王」が対をなす〔シズメ原理型〕から、和田タイプの〔シズメ原理・御霊鎮送型〕、木沢・下栗タイプの〔御霊封鎖型〕、上町タイプの〔御霊調伏型〕へと変化したと推測する。

その上で三類型の変化を遠山谷の歴史と重ねて検討すると、この変化は飢饉や疫病の流行、社会的混乱の歴史事象と一致すると指摘する。飢饉・疫病や社会的混乱は、百姓一揆で滅ぼされた遠山氏の祟りとして再認識され、それに対

抗するために、より強力な威力を求めて、新たな神々の構成が編み出されたとする。また、これによって祭りは《遠山氏御霊系八幡神》から《非遠山氏御霊系神社》へと江戸時代後期以降、明治時代に拡大し、そうしたなかで上町タイプは御霊鎮めの祭りとしての性格を保持しつづけたのに対して、他では御霊鎮めの祭りから村内の神々に守護を求める祭りへと変化していったという仮説を提示する。

第八章「百姓一揆伝承と遠山霜月祭」では、この祭りは他地の霜月神楽と同様に冬至月における「生まれ清まり」を主眼とする祭りであると同時に、前章で述べたように遠山氏の祟りを鎮めるというもう一つの主眼があることを踏まえ、百姓一揆伝承の考察を試みている。この百姓一揆は伝承やそれを記した古文献に諸説があり、これらを整理し、他の資料も加えながら、歴史的な事象と対比する。百姓一揆伝承は、大鹿村を中心に語られる天正年間説と遠山を中心に語られる元和年間説があるが、諸資料から歴史的な事実としては、天正期には遠山騒動と呼ぶべき混乱があり、元和期には遠山氏の改易やその後に千村樽

木代官の配下になった旧遠山氏家臣との対立による遠山騒動がある。これらが後に百姓一揆の伝承として再編され、これが近世期の飢饉や疫病流行、社会不安などと結びつき、遠山氏の祟り伝承をそのたびごとに復活させ、それへの対処で霜月祭が変化してきたとする。

第九章「鎌倉と遠山霜月祭」では、霜月祭は、鎌倉時代に遠山郷を神領地とした鶴岡八幡宮の湯立神事に荘園儀礼が加わった湯立神楽を源とするとの武井正弘の説を前提にし、この祭りと鎌倉との関係を検討する。ここでは延宝四年成立とみられる十五面（神太夫・婆・水の王・土の王・火の王・木の王・宮天伯・遠山八社神）をもち、霜月祭四タイプのなかでは最も整った形式となっている上町タイプを取り上げる。この十五面の内容には《京都》《神話》《鎌倉》《遠山》という四次元の意味伝承があり、なかでも遠山八社神（八社ノ神）は《八所御霊》《源氏の御霊》《遠山氏の御霊》の三次元の意味伝承をもつと結論づける。

一方、かつて鶴岡八幡宮で行われた湯立神楽は、遠山霜月祭と同じく、『吾妻鏡』にみられるようにきわめて呪術色が強い。また、鎌倉の御霊神社で伝承

される面掛行列は、『吾妻鏡』嘉禎四年の条に「八所の御霊祭」との記述がみえる鶴岡八幡宮の放生会の神幸祭に倣ったものと推測でき、男神七面と女神一面からなる八面と夫婦面一対のあり方は、上町タイプの遠山八社神と神太夫夫婦の構成と一致する。こうしたことから遠山と鎌倉とは江戸時代初期近くまでなんらかの繋がりを維持し、その関係から霜月祭の改変を行ったであろう宗教者の存在が考えられるとする。

終章では、以上の九章から遠山霜月祭の特徴は以下のように総括できるとする。

①冬至における太陽の衰弱と再生になぞらえ、生命の復活再生すなわち「生まれ清まり」を願う霜月祭祀の形や意味をよく留めている。したがって、霜月神楽を新穀の収穫感謝とする理解は当てはまらない。

②密教や修験道・陰陽道などにもとづいた両部神道の流れを汲み、神仏混淆の色彩の強い湯立に徹底してこだわる。

③鎌倉時代に信濃国唯一の鶴岡八幡宮神領となったことに起因すると考えられる八幡信仰を基盤として、百姓一揆で滅んだ後、祟りを起こしたという旧領

主遠山氏の御霊信仰を併せもつ。

④祭り全体が、祭場の清め、神迎え、湯立と舞、（神返し）面形舞、神返し、という構成をなし、細部に深い意味づけと細かな仕来りをもつ。

⑤民間の宗教者である禰宜を中心に村人によって担われ、「立願」を中心とした村人の篤い信仰によって支えられてきた。

⑥遠山谷という一地域に数多くの伝承地を抱え、なおかつ霜月祭に使用される神面二八六面の分析と比較検討によって、祭りの古い形とその後の変容のあり方を知ることができる。

⑦遠山氏の百姓一揆伝承は、飢饉や疫病流行と社会不安が高まるたびに村人に強く意識され、それを解決するために面の基本構成を変え、祭りの改変が加えられてきた。そこには高度な宗教的知識をもった宗教者が介在した。

以上のように遠山霜月祭の特徴をまとめた後、終章の最後には、儀礼内容や舞、神楽歌や祭文、湯立や祭り全体の構成についてのさらなる分析など十二項にわたる今後の課題を列記する。

論文審査の結果の要旨

この論文の研究対象である遠山霜月祭は、本居宣長の『玉勝間』第十三巻の「思ひぐさ」に「信濃国の或村々の神事にうたふ歌」として、川村（門村の誤り）・和田・木沢などの村里に湯立の神事があることと、そのなかでの歌が紹介されている。十八世紀末にはその存在が知られていただけではなく、多種の湯立や舞、面形舞など注目すべき特徴があり、西角井正慶をはじめとして昭和初期から民俗学、民俗芸能、祭祀研究など複数の学術分野から関心がもたれ、その実態把握や論述が行われてきた。実地調査に基づく研究は昭和四十年代以降に盛んになり、現在までに多くの研究著作が出ているが、この祭りの全容については、平成二十年『遠山霜月祭（上村）』（上村遠山霜月祭保存会・飯田市美術博物館）、平成二十二年『遠山霜月祭（南信濃①和田・八重河内・南和田編）』（飯田市美術博物館・遠山常民大学）、平成二十三年『遠山霜月祭（南信濃②木沢地区編）』（同前）の公刊と、上村の上町・中郷・程野・下栗の霜月祭映像記録四本、南信濃の和田・木沢の霜月祭映像記録二本の制作・発行によって明らか

になった。

三冊の調査報告書と六本の映像記録によって、遠山霜月祭の研究は大きく進展したのであり、この調査・記録事業の中心となったのが学位申請者の櫻井弘人であった。櫻井自身も遠山の生まれで霜月祭に接しながら成長し、現在もこの地に居をもち、飯田市美術博物館学芸員として先の報告書作成以前から霜月祭の研究を進めており、霜月祭への参与と研究は六十年ほどにわたっている。なかでも遠山霜月祭の調査報告書の作成は、この祭りの斎行者との共同作業でもあり、その次第や内容等の具体的叙述は高い信頼度をもつといえる。

学位申請論文である『遠山霜月祭の研究』は、こうした成果に基づいている。従来の研究は、祭りの起源伝承、湯立祭儀、「生まれ清まり」、面形舞など、この祭りから特定課題を設けてのものであったが、本論文は「論文の内容の要旨」に記したように霜月祭のほぼ全容を網羅した研究であるといっても過言ではない。それだけでなく個々の次第のなかでの呪文・唱言・歌や所作等祭儀・芸態は詳細、的確な叙述を行い、その意味や変遷などについての分析、仮説提示に

及んでいる。このことから今後の遠山霜月祭研究は、本論文が諸課題にわたってその基点となり、出発点となるともいえる。序章、第一章から第九章、終章、そして巻末の霜月祭式次第、神面一覧、霜月祭関連年表など七四六頁に及ぶ本論文が高く評価できる第一点はここにある。

研究対象である遠山霜月祭は、旧暦霜月に行われていたが、現在は十二月前半の斎行で、祭り次第は、十二月初めからの準備、祭礼日前日の宵祭、翌朝まで夜を徹しての本祭で構成されている。本祭は、明治時代以降に整えられた修祓に始まる例祭に続き、「座揃え」に始まる「古典祭」などと呼ばれる旧来からの内容をもち、「古典祭」の次第は、概ね、宮清めや神寄せの「神楽」、「神名帳」の申上げ、湯立、舞、願果たし、面形舞となっている。「神楽」は宮清めや神寄せの歌のことであり、数段階にわたる「湯立」が中心となる祭りといえる。

こうした次第・内容について、上村の上町、中郷、程野、下栗、南信濃の木沢、中立・八日市場、小道木、上島、須沢、和田・八重河内・大町の霜月祭の比較対照も含めて叙述、分析を進め、従来の研究を大きく進展させ、新たな見

解も示している。

なかでも本論文で最も注目されるのは、第六章から第八章で、廃絶した霜月祭など使用されていない面も含め二八六点の悉皆調査をもとに、紀年銘のある面を基準として面の編年分析を行い、霜月祭の面の基本構成とその組成の変遷についての仮説を提示していることである。面は、シズメの面以外では木沢では元和二年（一六一六）から寛永十七年（一六四〇）の遠山氏御霊面が古いもので、上町では延宝四年（一六七六）に遠山氏御霊として八面が八所御霊として組み立てられていて、こうした面構成の年代をもとに面形舞の変化を明らかにしている。

それは面形舞の組成について、霜月祭の各タイプを遠山氏御霊系八幡神社と非遠山氏御霊系神社という神社類型と組み合わせ、面形舞は「水の王」と「火の王」が対をなす〔シズメ原理型〕から和田タイプの〔シズメ原理・御霊鎮送型〕、木沢・下栗タイプの〔御霊封鎖型〕、上町タイプの〔御霊調伏型〕へと変化したと説く。この変化は、遠山谷の歴史と重ねると飢饉や疫病の流行、社会

的混乱と符合し、こうした飢饉・疫病や社会的混乱が、百姓一揆で滅ぼされた遠山氏の祟りとして再認識され、それに対抗するために、より強力な威力を求めて、新たな神々の構成が編み出された。さらに、これによって江戸時代後期以降に、祭りは《遠山氏御霊系八幡神社》から《非遠山氏御霊系神社》へと拡大したという仮説である。これは刮目すべき仮説であるが、霜月祭を行う神社で祀る神々からの神社類型、霜月祭の面の悉皆調査成果、各霜月祭の面形舞の構成から導き出されており、高い説得力をもつ。

また、従来の研究では不十分であった「舞」の芸態について詳細に調査・叙述し、「舞」には「五方拝」や「四方拝」という方位、「晴明判」「北斗七星」という軌跡、「三三九」や「七五三」という数に基づく構成原理があることを明らかにしている。

本論文にはこのような新たな知見がいくつも含まれているが、霜月祭の中核となる「湯立」については、その基盤形成をどのように考えるのか、次第終盤での面形舞形成以前の霜月祭の様相については、検討が不十分あるいは言及が

なく、重要な研究課題を残している。

しかし、本論文は長年の研究をもとに遠山霜月祭の全容把握を的確に行うとともに、新たな見解を多く示し、今後の霜月祭研究の基点となる。また、ここには日本各地に継承されている神楽研究への新たな視座も含まれている。よって本論文の提出者櫻井弘人は、博士（民俗学）の学位を授与される資格があると判断される。

令和五年一月二十五日

主　査　國學院大學教授　小川　直之　㊞

副　査　國學院大學教授　大石　泰夫　㊞

副　査　慶應義塾大学名誉教授

國學院大學大学院兼任講師　鈴木　正崇　㊞